

ニカイア信条に聴く⑩

「私たちのためにポンテリオ・ピラトのもとで十字架につけられ、苦しみを受け」(ローマ13:1~7)

一、私たちのために…十字架につけられ

「私たちのためにポンテリオ・ピラトのもとで十字架につけられ、苦しみを受け」が、きょう見ていく言葉ですが、ニカイア信条が語っていることの特徴を知るために、使徒信条の並行箇所と比較してみたいと思います。

使徒信条における、この内容と並行する文句は、「ポンテリオ・ピラトのもとに苦しみを受け、十字架につけられ、」です。何がちがうのでしょうか。ニカイア信条に「私たちのために」という言葉が入っている点が異なります。「イエス・キリストが十字架につけられたのは私たちのためであった」というのがニカイア信条の強調点です。すなわち、まことの神であられる方が、自らの意思で、私たちのために十字架につけられることを良しとされた、ということです。

福音書によれば、神が人となられた御子イエス・キリストは、十字架につけられる直前まで、十字架の道を歩むべきか否かについての御心を、父なる神に問うていたことを知ります(↓マルコ14:36)。こうして、十字架につけ

れることが神の御意思であると確信した主イエス・キリストは、十字架の道を歩まれました。そして、十字架につけられたことよって、罪人である私たちに下る、義なる神からの罰をすべて受けてくださいました。神御自身であられるイエス・キリストが十字架につけられたがゆえに、意味のある出来事となりました。

二、ポンテリオ・ピラトのもとで十字架につけられ

続いて、「ポンテリオ・ピラトのもとで十字架につけられ」なる文句を見てまいります。ポンテリオ・ピラトはローマ帝国から、紀元26年より36年までの10年間、ユダヤの総督として遣わされた人物です。なぜ、ポンテリオ・ピラトが聖書の中に登場するのでしょうか。信条の中に現れるのでしょうか。その理由は、神御自身による、罪人を救うための御業が、人類の歴史のただ中において起こったことを語っているからです。私たちが住んでいる世界は神によって造られました。アダムによつて罪が入り、罪のゆえに、創造された当時の「見よ、それは非常に良かった」世界にひずみが生じています。そうではあっても、世界は神の御支配の中に生かされています。それが、聖書より教えられていることです。きょうの聖書箇所である、ローマ人への手紙13章1節を見

てまいります。「人はみな、上に立つ権威に従うべきです。神によらない権威はなく、存在している権威はすべて、神によつて立てられているからです。」とあります。ポンテリオ・ピラトは、主イエスに、法を犯した者としての罪を認めず、刑罰を下さないように働きかけましたが、群衆の声に押されてしまい、結局自らの地位と名誉を守るために、主イエスに、当時重罪人に下される十字架刑を適用することを決定しました。

考えてみれば、ローマ帝国から遣わされた、時の権力者ピラトも、迷える一匹の子羊でした。ですが、主イエスはピラトのためにも、十字架で贖いの死を遂げてくださったと受け止めるべきです。

三、十字架につけられ、苦しみを受け

最後に、「十字架につけられ、苦しみを受け」なる文句を見てまいります。使徒信条の並行箇所には「ポンテリオ・ピラトのもとに苦しみを受け、十字架につけられ」とあります。そのちがいは何を意味しているのでしょうか。ちがいを知

るために、まず私たちが慣れ親しんでおります使徒信条の意味を確認したいと思います。使徒信条を、もう少し前から見ますと、「主は聖霊によりてやどり、おとめマリヤより生れ、ポンテリオ・ピラトのもとに苦しみを受け、十字架につけられ」とあります。使徒信条を唱えながら、多くの方が思います。「イエスさま

の公生涯のことが書かれていない。どこに行ってしまったのだろうか。重要でないからなのか」と。これについては、歴史的な文書である『ハイデルベルク信仰問答』に、次のように書かれています。「問37 「苦しみを受け」という小さな句は、何を、意味していますか。」答 主が、この世の公生涯において、ことに、その終りにおいて、絶えず、全人類の罪に對する、神の怒りを、身と魂とをもつて受け(以下略)」と。すなわち、使徒信条においては、主イエスが「苦しみを受け」られたという言葉の中に、公生涯における御苦しみが入っていたという解説です。「なるほど」と思われます。

一方でニカイア信条は、「ポンテリオ・ピラトのもとで十字架につけられ、苦しみを受け」ですから、ボーツと読むと、「十字架につけられて死んでから、苦しみを受け、とはどういうことなのか?」となります。実は、ニカイア信条においては、「十字架につけられたことそのものが苦しみを受けられたことであった」「主の御苦しみとは十字架であった」という意味になっています。

罪人が救われるために十字架で苦しまれるという御業を成し遂げて下さった主イエス・キリストに、そして父・子・聖霊なる神に、感謝をささげようではありませんか。